

政務調査視察報告書

(実施日 平成 21 年 3 月 18 日～20 日)

自民党県政会

< 第一班 >

視察テーマ：「由布院における観光の取り組み」について

視 察 先： 由布院温泉観光協会

日 時： 3 月 19 日 9：30～11：30

説 明 者：由布院観光総合事務所 事務局長 米田 誠司 氏

由布院温泉観光協会 副会長 富永 希一 氏

（１）福井県について

NHK 連続テレビ小説「ちりとてちん」の以前のシリーズ（H17 年）に大分県由布院を舞台とした「風のハルカ」があったため、同ドラマ終了後も「ちりとてちん」を通じて福井県には大きな興味を持っていた。福井県には由布院にはないたくさんの観光資源があり、観光に注力していこうとする方針は理解できるものがある。

（２）観光総合事務所について

由布院温泉観光協会と由布院温泉旅館組合の二つの組織にて由布院観光総合事務所を構成している。約 100 件の旅館から成り比較的小さい組織のため仲間意識も強くまとまりは非常に良い。会員となる旅館は 1 泊 2 食のチャージが 6000 円から 60,000 円と幅広く、保有客室数の平均が 12, 3 室と非常に規模は小さい。しかしながら観光収入はその規模に比べ非常に大きく年間約 350 億円、農業出荷額が 14 億円であることからみてもその収入が市の収入の柱であることに異論はない。

通常の観光協会としての機能は大都市に趣き、PR、宣伝などにより地元をアピールし誘客することが多いが、同協会ではこれらのことは一切行わず、単にビジネスとしての観光価値を上げることのみならず、観光をテーマとした「まちづくり」に尽力し、景観保全、環境保全など子供、孫にまでこの由布院のすばらしい自然を受け継いでゆけるような由布院を作り上げ、結果としてそ

のすばらしい街に訪れ、滞在したいという観光客に来てもらうという方針で運営を行っている。その代替として情報発信についてはマスコミとの緊密化によって行う。ただ、取材者の意図に任せるのではなくしっかりと話し合いを行い、由布院の住民としてアピールしたいことを理解してもらった上での情報発信をお願いしているとのこと。

観光資源に乏しい湯布院ではイベントによる集客が一つの柱となる。「神楽」を毎月開催、市内各神楽座が上演を行っている。来場者数も年々増加し、地元住民も訪れるイベントとなっている。

協会の会員年代層については 2006 年 5 月頃から世代交代が始まり、現在組合理事の 8 割が 20 代 30 代の若手となっている。

（３）主な取り組み

現在、6 つの委員会を組織し、6 つのプロジェクトを走らせている。これらプロジェクトを総合した活動である「湯布院サステイナブルツーリズムプロジェクト」は国の「地方の元気再生事業」に認定された。

主なものは以下の通り

○風の食卓地消地産モデル事業

地元の食材を利用するという地産地消ではなく、地元でお客様に提供したい料理などに利用したい食材を農家に生産頂くという「地消地産」を進めていく事業で旅館の料理人たちを集め料理講習会や試食会を開催したり、単に料理だけではなくお店の景観、家具、食器や流れる BGMなどを総合的にプロデュースしていく。

○ものづくりコミュニティービジネス事業

「よりよい景観」の創造のため CG によりシミュレーションを行う。またこれらの作品は「湯布院建築・環境デザインコンクール」にて審査され優秀な作品については表彰が行われる。

○情報発信システム構築事業

情報発信するための素材となるまちづくり情報、地域資源情報の収集と加工を行う。旅行雑誌などに取り上げられる情報のいくつかは地元としてアピールしたいものと一致しないことも多かった。また、「由布院」というブランドを勝手に利用され、地元としての意図が明確にお客様に伝わらないという問題もあったため、公式ガイド「ゆふいんブック」を作成した。

○物産の開発事業

通常、観光協会において行われることはなかった物産の開発にも積極的に活動している。「環境」をテーマに売上の一部が由布院の環境保全に利用される形での商品開発を行っており、昨年は「ゆふいんサイダー」を始めとして3商品が企画、販売開始された。

（４）質疑応答

Q：協会運営上難しい点は？

A：他の地域でよく言われる「世代交代の難しさ」については、同協会においてほとんど感じられない。先輩達は普段から協会事業に若手を巻き込み、酒を酌み交わしコミュニケーションが密であったことが原因だと考える。若手もまた、現在、いろいろな事業を進める際、先輩達を引き込みながら活動している。

Q：自分の商売とボランティアとしての協会活動のバランスは？

A：まちの発展なくして自らの商売が発展することはないというのが協会メンバーの共通認識であるため積極的な活動が図られていると考える。とは言いつつも、昨今の景気後退によるボランティア参加への影響は少ないとは言えず気持では参加したくとも自分の仕事に追われ、ままならないという状況も見られる。

Q：観光地として別府がそれほどかんばしい状況ではない中、由布院はなぜ成功していると思うか？

A：時代の趨勢として大人数の団体旅行より一人一人の個性や感性によって個人や家族など少人数での旅行を消費者は求めるようになってきていると考える。その意味で由布院の宿は小規模ながら個々が個性的であり、その志向にマッチしたサービスが提供できているのではないかと考える。

Q：合併によるブランド維持と希薄化に関する不安は？

A：合併に関するコンセンサスが得られぬまま法定協議会発足の直前になって初めて合併の方針が打ち出されたこともあり、協会としても由布院ブランドが拡散化、希薄化、変化することへの危惧から合併には大反対であった。県外資本の教会活動への参加要請を含め、いい形で由布院ブランドが広がるよう努力が必要だと考える。農業主体地区との合併により農業と観光の融和がしやすくなったというメリットもある。

< 第二班 >

視察テーマ：「観光、まちづくり」について

視 察 先 ① JR 九州由布院駅および周辺のまちなみ

日 時： 3 月 19 日 9：30～11：30

説 明 者： JR 九州由布院駅 駅長 小野 洋治 氏

視 察 先 ② 黒川温泉観光旅館協同組合

日 時： 3 月 19 日 15：30～17：00

説 明 者： 黒川温泉観光旅館協同組合 代表理事 後藤 健吾 氏

視察概要

○ 視察先①

- ・改札口がない駅として、自由にプラットホームに出入りができる。
- ・プラットホームに「あし湯」があり、観光客および住民も利用できる。

○ 視察先②

- ・会員 24 軒の旅館を黒川温泉全体の 1 軒の旅館と考え、各旅館を各部屋との感覚で進めたとのことである。

○ 視察先①、②共通事項

- ・取り組みに対する、住民を含めたまちづくりに対する熱意が大きな成果を生み、そして熱意をもったリーダーが必ず複数（2～3 名）いる。
- ・全国に情報を発信する仕掛け人が存在する。
- ・両温泉街ともに、道路幅が狭く歩行は困難であるが、不満はあまり出ていないとのことである。
- ・商店街と温泉、そして住民全体でまちづくりに努力している姿が印象的で

ある。

- ・ バブル期の頃までは、温泉といえば男性が団体で乗り込んで宴会をするというイメージであったが、発想を転換し、若い女性や家族をターゲットにして仕掛けた結果が功を奏した形となっている。
- ・ 両温泉ともに、平成14、15年をピークに観光客は減少しているようである。特に黒川温泉は、「自然を守り愛する会」で植樹を毎年実施するなど自然を残す運動を行っており、常に仕掛けていくという姿勢が見受けられる。

< 第一班 >

視察テーマ：「木質バイオマス発電所」について

視 察 先：株式会社九州ウッドマテリアル／株式会社日田ウッドパワー

日 時： 3 月 19 日 13：20～14：30

説 明 者： 株式会社九州ウッドマテリアル 代表取締役 森山 政美

（１）事業内容および施設概要

広域地域から出る木くず（製剤屑、建設廃材、樹木など）から品質基準をクリアーした燃料用チップを生産、木質バイオマス発電所である株式会社日田ウッドパワー日田発電所へ販売供給している。発電出力 12000kw 以上の木質チップ専焼発電所は日本に 3 か所（他に山口県岩国市、福島県白河市）存在するが、木質チップの生産供給施設と発電所が隣接しているのはこの地のみであり、輸送効率の非常に悪い木質チップを燃料とするバイオマス発電所としては、フェュエルマイレージ（燃料の輸送に関わる環境負荷）の観点からも大きな競争力となっている。

ウッドマテリアル社の親会社は大型破砕機、粉碎機の輸入販売を業とする株式会社モリショウ。協力会社からの木質チップの買い入れについては品質基準を設け、発電に適正なものだけ買い入れている。買い入れ価格は品質（含水率）によって上下する。含水率の低いチップについては燃焼効率もよく価格も高く設定される。一般的に建築廃材については木の伐採後時間も経っており含水率は低く、生木や開墾屑などは高い。

ここで生産されるチップは 6mm～100mm という品質基準が設定され、6mm 以下のものについてはストックされ、堆肥などに利用される。また 100mm 以上のチップについては再度破砕行程に回され最終的に品質基準を満たす形となる。

～発電所概要～

発電出力：12,000 k w（10,000kw を九州電力へ卸売、2,000kw は自社消費）

敷地面積：20,440 m²

燃料使用量：300 t ／日（100t をウッドマテリアルより、200t を約 90 社の
協力会社より）

この発電所からの供給電力は 22,700 世帯分の年間電力消費量に相当し、木質チップ燃料の使用はカーボンニュートラルと考えられ、その CO2 削減量は年間 36,720t、原油換算でドラム缶 115,000 本分にもものぼる。環境に配慮した運営が行われており、ボイラー水はリサイクルされ水資源の使用量低減に尽力している。発電所総工費は 45 億円うち 1 / 3 の 15 億円は国からの補助による。

（２）質疑応答

Q：kwh あたりの発電コストと採算性は？

A：発電所を運営する日田ウッドパワーの親会社である株式会社ファーストエスコとの守秘義務契約により発電コストは公開できない。現状の発電種別におけるコストは原子力、火力に優位性はあるが排出権取引上のクレジットのみならず、RPS 法（電気事業者による新エネルギー等の利用に関する特別措置法）上のクレジットも経済価値として大きなものがあり、採算は取れている。

Q：協力会社としてチップを供給するには同社の親会社であるモリショウ社の破砕機を導入する必要があるのか？

A：必然的にモリショウ社の顧客が会員企業となる確率は高くなる。しかし、会員資格という設定はなく、純粹に品質を確保して供給してもらえるのであれば他社商品にて破砕、粉砕を行っている企業であっても問題はない

Q：チップ製造工程の原料となる製材屑、建築廃材は産業廃棄物にあたるのか？

A：産業廃棄物の取り扱いとなる。従って、産業廃棄物の一つの項目である「木くず」の処理業者として許可を取っており、処理費用を排出事業者から受け取っている。もちろんマニフェストも利用している。

< 第一班、第二班合同 >

視察テーマ：「地熱発電」について

視 察 先：九州電力八丁原地熱発電所

日 時：2月20日 9：30～10：30

（１）発電所概要

地下から取り出した高温、高圧の蒸気を利用するため、化石燃料を一切使わずクリーンな発電となり、発電量を燃料換算すると石油で年間 20 万キロリットルとなる。地下の岩盤の中に閉じ込められたマグマの熱で高温となった地下水を蒸気井で取り出し発電に利用、蒸気を取り出した残りの熱水については再度地中へ戻す。

取り出された蒸気は気水分離機で蒸気と熱水に分離され、蒸気はそのままタービンへ、熱水についてはフラッシュャーに導かれ、圧力を下げることによりもう一度蒸発させその蒸気も発電に利用される。このように熱の有効利用を図るシステムはダブルフラッシュシステムと呼ばれている。

同発電所は日本最大の地熱発電所であり、昭和 52 年 6 月に 1 号機が、平成 2 年 6 月には 2 号機が完成した。九州では 2 番目、全国では 5 番目の完成であり、平成 18 年には八丁原バイナリー発電所（後述）も完成した。

～発電所概要～

発電出力： 110,000kw （1 号機 2 号機それぞれ 55,000kw）

タービン： ローター重量 30t 直径 2m 3600 回転／分
クロムモリブデンバナジウム鋼製 製作費用 5 億円

蒸気井： 16 本（1 号機 7 本 2 号機 9 本）

還元井： 10 本（1 号機 2 号機それぞれ 5 本）

総工費： 380 億円（1 号機 150 億円 2 号機 230 億円）

蒸気井はそれぞれ深さが違い、浅いもので 760m、最も深いもので 3000m にも達する。発電に利用される蒸気は地熱貯留層とよばれる地層に存在しその蒸気温度は約 300℃となる。その上部には「キャップロック」と言われる不透水層があり、ちょうど地熱貯留層に対し蓋の役目をしている。このキャップロックの存在が地熱発電には重要で条件が整う地熱発電所に適した地層というのはどこにでもあり、蒸気井さえ掘れば発電できるというものではない。

敷地内にある八丁原バイナリー発電所では地下からの蒸気、熱水を熱源として沸点の低い媒体を加熱、蒸発させその媒体蒸気で発電を行っている。このシステムでは従来の地熱発電では利用できなかった比較的低温の蒸気、熱水での発電が可能となる。

（２）質疑応答

Q：蒸気井は温泉等の配管と同じようにメンテナンスが必要と考えられるが？

A：それぞれの蒸気井は 2 年一度、500 気圧の高圧水によりジェット洗浄が行われ、管内に付着した固形物（主成分は二酸化ケイ素やカルシウム）がそぎ落とされる。

Q：地元黒川の温泉街の住民からは地熱発電の反対運動があると聞いたが？

A：確かにある。地熱貯留層は温泉に利用される源泉とくらべはるかに深い所に存在し、全く別のものである。従って貯留層の熱水の利用により温泉が枯れるようなことはあり得ないが、住民の方のイメージとしては理解しづらく反対運動を受けている。発電所としてもしっかりと説明責任を果たすべく努力しているが開催した説明会にも全く参加頂けず聞く耳を持っていただけない状態にある。

Q：不透水であるキャップロックにより、雨水が地熱貯留層に届くことはなく、貯留層の劣化が激しいのではないか？

A：地熱貯留層に存在する高温、高圧の蒸気、熱水は雨水が上から下への方

向で浸透し、マグマで熱せられたものではなく水平方向からじわじわと湧水のように浸透してきたものなのでキャップロックの影響はない。